



松島 正之

インテグラル
常勤顧問



London Never Leaves Me

92年末から96年初めまで、日本銀行駐在参事としてロンドンで勤務した。当時、英国は、サッチャーリズムの経済効果が出始め、ロンドンの金融サービスを中心に活力がよみがえりつつあった。

こうした中で、シティの守護神である英蘭銀行（イングランド銀行：英国の中央銀行）は、1994年、創立300周年を迎えた。スチュアート王朝下、政府の資金調達機関として、職員17人、守衛2人でスタートした300年の歴史は、時代、時代のニーズを的確に把握し、柔軟かつしたたかに対応してきた同行の変貌を物語っている。創立300周年の式典を主宰したのがイングランド銀行エディ・ジョージ総裁（当時）であ

る。中央銀行マンとして一生を貫き、その専門性や経験は他の追随を許さない一方、誰からも慕われる人柄であり、接して学ぶところが極めて大であった。

また、駐在中の大きなイベントは、ユーロの通貨統合に向けての準備作業であった。通貨統合に参加しなかった英国をも含め、欧州全体が壮大なスキームの構築に真摯^{しんし}に取り組んでいた。毎月のように、ロンドンから出張していたバーゼルの国際決済銀行（BIS）でも、参加資格要件、スキームの頑健性について白熱した議論が展開された。通貨統合については、欧州経済圏の形成という経済的

誘引はあるにしても、当時の首脳であるコール氏とミッテラン氏の強い信頼関係がなければ、実現にこぎ着けられなかったのは間違いない。独仏は、普仏戦争、第一次・二次世界大戦と三度にわたり戦火を交えた不倶^{ふく}戴^{たい}天^{てん}の敵同士であった。しかし、欧州の新時代を切り開くため、手を携えて、「通貨同盟」をけん引していくことにかじを切り替えた両国首脳のリーダーシップには、深い感銘を覚えた。現在、ユーロの先行きには、懐疑論も少なくないが、同盟の深化に向けて、確固たる政治意思の発揮に期待したい。



イングランド銀行エディ・ジョージ総裁（当時）と



国際決済銀行（BIS）を背景に